

「わたしは、世界をその悪のゆえに、逆らう者をその罪のゆえに罰する(イザヤ 13:11)」。私たちは不運を被ると、「罰せられているのか」と恐れ、願いが成就すると「祈りが聞かれた」と喜ぶ。

然り、否、神の御心はにわかには断ぜられない。祈りが聞かれるか、聞かれぬか、と人は揺れ動くが、どちらにせよ神は、私たちを見守っておられる。

とりわけキリストは、十字架で私を贖い、「私」として在る。

罰せられ、私たちの驕りは砕かれ、高ぶりが挫かれるのは(13:11)、私たちを「純金よりもまれなものとし、オフィルの黄金よりも得難いものとする(13:12)」ため。

神は私たちを案ずるがゆえに怒る(13:13)。御自分が生んだ者への、おせっかいなほどの母(父)の愛。

罰にも見え(13:11)、祝福にも見える(13:12)。

「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはならぬ(ガラテヤ 6:14a)」。なぜ十字架以外のものを誇ってはならぬのか。

「この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされている(6:14b)」から。表現が修辭的で分かりづらいが、預言書に助けてもらおう。

神は「世を悪のゆえに、人を罪のゆえに(イザヤ 13:11)」罰する。だが、悪と罪のど真ん中に十字架が建てられ、私たちは「純金よりも、黄金よりも」尊く、得難いものにされた(13:12)。

世と私は互いに「はりつけ」にされが、十字架ゆえに、尊さが互いに響き合っている。

教会が伝道をするのは、世と分かちがたく在るから。世の不安と苦しみの海にあって、教会という島だけが救われることはありえない。

教会は「ひよっこりひょうたん島」のように、潮に乗って漂流する。

相互に「はりつけ」にされているから(ガラテヤ 6:14)、キリストの島は、新たな島を生む。

「はりつけ」とはどういう状態か。「わたしは、キリストと共に十字架につけられている。生きているのはもはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる(2:19b~20a)」。私たちの内には生けるキリストがおられるのだから、「大切なのは、新しく創造されること(6:15)」。

私たちは各々、苦しみ悩む。だがその苦しみに、恐れに、絶望に、拘束されたままではない。十字架によってキリストが私たちの「命」となっているから。

「生きているのはもはやわたしではない」とは誤解しやすいが、意味はむしろ逆だ。私は新たに創造され(IIコリント 5:17)、私は古い私以上に、私自身になっている。

「わたしは世に対してはりつけにされている(ガラテヤ 6:14)」がゆえにキリストの弟子だ。「あなたがたは世の光である(マタイ 5:14)」。

「世はわたしに対してはりつけにされている」がゆえに、世は私を求めている。もちろん私自身を、ではなく、「わたしの内に生きておられるキリスト(ガラテヤ 2:20)」の光を必要としている。そういう意味で皆さんは世の光なのだ。

死や恐れ、拘束から解き放たれ、キリストの愛と自由を分かち合うために、「世の光」としてここに建てられ、苦しみの海へ押し出されている。

縮小経済、グローバル化、ITが徹底されていく未知の社会でありながら、戦争や飢餓など従来の苦しみは続いている。どんな時代でも、キリストと共に十字架につけられて死んだ者に(2:19)、キリストの命は溢れ輝く。死んで新たに創造される私たちは(6:15)、キリストの命で、真の平和に仕える(6:16)。



《おまけのひとこと》

私の姿は私には分からない 世の鏡に映った歪んだ姿がかりうじて教えてくれる 虚構ではあろう 恣意的増減もあろう 赦された輪郭を辿っていくと私が概観できる 罪は自画像を描くによい鉛筆